

## 特別レポート◆◇日本のアドボカシーグループが見た MD アンダーソン

一般社団法人 日本癌医療翻訳アソシエイツ（JAMT：ジャムティ）副理事長  
野中 希



2012年6月7日、上野直人先生のお取り計らいで、初めてテキサス大学MDアンダーソンがんセンター（以下MDAと呼ぶ）を訪問、見学させていただきました。

私たちは、がんのアドボカシーグループとして、2004年から医療翻訳ボランティアが集まり、海外の貴重な文献を翻訳してウェブサイトに掲載する『[海外癌医療情報リファレンス](#)』を運営してきました。MDAは、サイト立ち上げ時から最も信頼できる最新情報を提供してくれる施設の一つでした。翻訳に理解を示す海外の組織が少ない中、非常に協力的に翻訳許諾に対応していただけた施設であり、私にとって長年の希望が叶った感慨深い訪問になりました。

### 1. MDAの巨大さ

話には聞いていましたが、まず、その大きさに驚きました。ヒューストン・メディカルセンターという町全体が、80～100という病院関連ビルの集まりです。MDA以外のテキサス大学関連病院やベイラー医科大学など他の病院施設もたくさんあります。そのうち約20～30の建物をMDAが有していると伺いましたので、私が訪れたのはその中のほんの一部です。

各棟にはスカイブリッジと呼ばれる通路が通っていて、外に出ることなく行き来できます。移動の大変な患者さんには、空港のようにカートが往復していますので利用することができます。暑さや雨天の場合のことを考えると、外を歩くよりかなり効率的に移動できます。ただ、どの棟にいるのか迷子にならないように常に気をつけなければなりません。



MD Anderson Cancer Center (MDA)は多数の建物から構成されている。写真は、外来病棟の Clark Clinic

### 2. 明るく快適な院内

まず、上野先生のオフィスがある Mays Clinic / Cancer Prevention Building を訪れました。何人か日本のアドボカシーグループが見た MD アンダーソン

の現場の方々にお話を伺う機会も設定いただいたり、上野先生に棟内を案内していただいたりしました。診察室や総合受付のフロアその他、チャペルや補完代替療法としてヨガなどを行う部屋のほか、一流ホテルが経営するレストランを含めアメニティも整備されていて、院内がとても明るく快適でした。

暗いコンクリートに囲まれた病院のイメージとはかけ離れており、個人的な感想ですが、気持ちを上向かせ、普段と変わらない暮らしの一部として闘病生活を受けとめられるのに少しでも助けになるのではないかと気がしました。



MDA の診察室を案内する上野直人先生

### 3. 院内各所で活躍する多数のボランティア

MDA には 2,000 人以上のボランティアが現在登録されており、その方々によって運営・サポートされている場所も複数あります。病院グッズを販売する売店や、遠方からきた患者さん方が診察時間まで休憩や仮眠がとれる場所を提供するホスピタリティセンターなどもボランティアによって運営されていました。

患者教育のための図書館（Learning Center）には、病気の資料や書物がたくさん揃えられていました。最新の論文情報も提供され、希望すればプリントしてもらえるとのことでした。



患者さんのための Learning Center(図書館)

受付の待合室（というよりホールといったほうが適切）では、乳がん経験者であるボランティアの方々が常時、患者さん方の相談にのるのだそうです。ボランティアの女性に話を聞くこともできました。彼女は週に 2 回程度ボランティアに来て、診断された直後の患者さんなど、助けを必要としている方と話をすると語っていました。

### 4. MDA の臨床試験体制について

今回の渡米前に、上野先生に、MDA の臨床試験がどのように実施されているか学びたいという希望をお伝えしましたところ、Morgan Welch 炎症性乳がん基金のリーサーチナースである Jie Willey さんに日本のアドボカシーグループが見た MD アンダーソン



Morgan Welch 炎症性乳がんリサーチプログラムの Jie Willey (RN)さんと筆者(右)

お話を伺う機会をいただきました。MDA がたくさんの臨床試験を行っていることや、倫理委員会 (IRB) 承認などにも独自のプロセスを経ていると伺っていたので非常に楽しみにしていました。Jie との話で、たくさんあった私の疑問も大部分が解決しました。

MDA で現在まで実施している臨床試験は 2,400 ほどと聞き、耳を疑いました。1 施設でそれだけの数の患者が集まっているために可能になるとのことです。彼女の話によると、MDA の乳腺腫瘍内科部門では、4 段階のレビュー方式がとられています。はじめにコンセプトのレビュー委員会、次にそのコンセプトはレビュー会議を通して承認され、MDA の臨床研究委員会 (CRC) による承認を受ける。そして、その後、初めて倫理委員会 (IRB) にかかけられることになるということです。

臨床試験の倫理委員には、通常、専門家でない一般の人の参加が義務付けられますが、一般人が臨床試験を評価するのは非常に難しいことです。上記のプロセスであれば、倫理委員会の段階ではすでに科学的、医学的な議論や評価は完了しており、一般や患者サイドの委員は、患者として参加した場合の不都合などの点に集中できます。

## 5. 上野先生の研究室のラボミーティングに参加して

もう一つ、貴重な経験をさせていただいたのは、上野先生の研究室のラボミーティングに参加させていただけたことです。学会発表準備として、パワーポイントを用いて上野先生や同僚の前で模擬発表され、それに対してみなさんから一つ一つ詳細なアドバイスがなされる場でした。

この日は、炎症性乳がんの非常に興味深い知見について、日本から研修に来られていた増田絢子先生が発表されていました。質問に対する端的な回答の仕方のコツから、スラ

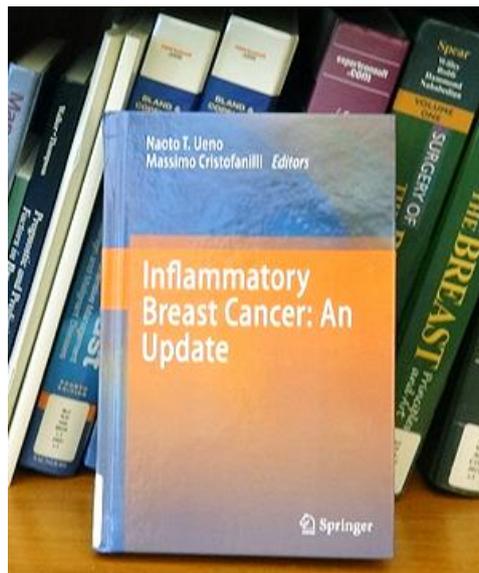


MDA の Mays Clinic の 5 階にあるブレストセンターの案内標識の前に立つ上野直人先生。このフロアには、画像診断など乳がんに関する様々なものがある

イドのフォントの大きさなどの細かな点に至るまで、発表前に仲間内で徹底的に指摘して最善のものに作り上げるのが慣習とのことです。また、増田先生によると、論文を常に書く機会があり、その場合も文章の科学的校正をする部署も整っていて大変助かるとおっしゃっていました。患者にとっても医師にとっても行き届いた設備やシステムがあるようです。

増田先生については、日本対がん協会がリレー・フォー・ライフの寄付金により、医学研修生として米国 MDA に送られた初のドクターです。「患者さんらの寄付によって留学させてもらったので、必ず結果をもって日本の患者さんに還元しなければ」と言われていたのがとても印象的でした。

炎症性乳がんに関する上野先生の著書 (Learning Center 所蔵) →



## 6. おわりに

この日、日本から MDA を訪問されていた先生や新たに研修に渡米されてきた先生ご夫妻、そして上野先生の奥様にもお目にかかれ、みなさんで楽しく夕食をご一緒させていただきました。1 日ではありましたが、米国で No.1 の座を譲らない MDA の施設を実際に拝見し、現地で医療者の方々、そして患者、ボランティアの方々らとの連携を感じることができ、本当に貴重な経験になりました。上野先生はじめ、MDA の方々に心からお礼申し上げます。

(2012 年 9 月執筆)